

P・フルキエ著「公民の倫理—入門哲学講義—」筑摩書房1977年9月25日刊を読む

## 知育と訓育

「子供はまず語るが、語ることを理解するのに、彼には一生かかる」と、アランは述べている。（『人間素描』）。逆説めいてはいるが、ここにはいちまつの真実が含まれている。実際、単語は、表面に見えるよりもはるかに豊かな内容をもっている。それ故、古典語教育の主な訓練の一つは、単語が秘めている思想の品定めをするために、単語について考察することである。それ故この方法を、この章の初めに現われた二つの名詞、知育と訓育に適用してみよう。

多くの場合、この二つの語は、どちらも使われる。教育施設というのに、*maison d'instruction* とも *maison d'education* とも言われるが、殆ど両方とも違いはない。学校の組織、一般には、私達を文明人にする文化の維持、発展を司る官庁は、かつては《公共の *instruction* の省》とよばれたが、今は《国民の *education* の省》とよばれる。[訳注＝日本の文部省にあたる。]

しかし、この官庁の名称変更は、この二つの語が、厳密には同意語でないことを示唆している。この両者の意味を明確にしようとするれば、そこから、この両者の間の関係を規定することになるだろう。

### I 知育(Instruction)

知育というフランス語の名詞は、《装備する》を意味する *instruere* というラテン語の動詞から出ている。たとえば、ラテン語の *instruere navem* とは、船を艦装する、即ち、航海に必要な船具、人員等の性能を備えさせることである。（フランス語ではむしろ、*armer un navire* というが）。知育ということは、それ故、人生に向って装備させることである。

#### 1. 定義

- (1) 知育という語によって、「学校での授業または書物での個人的な研究によって、獲得される知識の総体」と理解される。この定義の主要な観念を、さらにとり上げよう。
- (2) 知育は、知識の総体を前提とする。実際、知識を得るためには、歴史上のある人物、化学的物質の特性、ある型のモーターの機能を知るだけでは充分ではなく、現代人に必要と考えらえる一定量の知をわが物にしてしまわなければならない。
- (3) 知育は、教えられることによって、あるいは自習によって、行われる。そのことによって、知育は、一方では本能から、他方では経験から区別される。

本能は生まれつきのもので、獲得されたり、学習されたりするものではない。みそざいは、巣を造るのを学ぶ必要はないし、くもは、巣をかけるのを学ぶ必要はない。これらは好きな時に、巣を造るのに必要な微妙な作業を、試行錯誤もなく、考えこむこともなく、自然になしとげてしまう。反対に、人間は本能的な技術がないので、すべてを学ばねばならない。

- (4) 人間は、まず経験によって学習する。即ち、視覚、聴覚、触覚等の感覚器官へ、事物を直接に作用させることによって学習する。火が燃え、茨が刺すとげをもっていることを学ぶのは、真赤になった石炭に触れたり、垣根に手を触れるのでなければどうしてわかるだろうか。同様に、原始人が植物に対する寒気や暑熱の作用を学んだのは、夜の霜の後や、乾期の後の作物の状態を見

ることによってである。

- (5) 結局、私達のあらゆる知識はこの種の経験から来るのだが、かといってそれらは、直接私達自身によってなされた経験だけから来るわけではない。たとえば、砒素が人を殺すということを私が知るの、私自身か、他人でそのことを実験したためではない。長い年月の間に人々によってなされた経験の思い出が、記憶によって保存され、書物のうちに記録されて来たのである。教えるということは、過去の世代の経験によって獲得された意識を、おとなの人達——両親、小学校の先生、中学高校の先生——が行う伝達なのである。
- (6) 教えるということのおかげで、二十世紀の子供は、古代の最大の賢者たちが、持つことができたらきっと喜んだと思われる、巨大な量の知識を自由に使えるのである。

## 2. 知育の役割

- (1) 知識を得ることが何の役にたつかを規定するためには、語源に戻って知育は人生に向けて人間を装備すること、と答えることが出来よう。無知な人は、武器のない平氏、推進力(櫂、帆、エンジン)も舵も持たぬ船にたとえられよう。
- (2) 人生での成功を条件づける知育の実際の利益が普通考えられる。どんな職業でも、知は能率の改善を確実にしてくれるし、知育の程度は、社会的尺度での人間の分類にとって最も重要な要素である。
- (3) しかしこのことは充分考えられていないが、私達は、知育を受けることによって真に人間を作る諸能力、特に知性の開発をひきおこす。これこそ、学生時代の最も貴重な結果である。実際、大切なことは、学校から多量の知識を得て去ることよりも、知識を得るために、精神を鍛えることである。
- (4) 学ばなければならないのは、勉強すること、よく考えること、意見を交換すること、選ぶこと、決めること、想像すること、一よく、速く一読むこと、一明確に、簡潔に一書くこと、美しいものを味わうことであって、書物の中にいつでも見出せる知識を蓄積するだけであってはならない。ただし、その書物を探す方法は知らねばならないが。(『1985年に向けての考察』計画のための立案。フランス公文書、1964年)
- (5) 学生時代に学んだことをすべて忘れたとしても、考え、推論する習慣は失わないだろう。これ以上重要な習慣はあるまい。この習慣によってこそ、私達は真に人間であるのだし、私達が、動物よりも無限に高い部類に入るのもそのためである。

P4~6